

5月27日(日) 13:55~14:35 第二分科会:筑紫女学園大学スクワーヴァティーホール

沖一峨における画風の多様性について
—人的交流との関連から—

鳥取県立博物館 山下 真由美
YAMASHITA Mayumi

江戸時代後期に江戸の地で活躍した沖一峨(1796~1861)は、鳥取藩の御抱え絵師として知られる。一峨は鍛冶橋狩野家の門人でありながら、狩野派のみならず、琳派・やまと絵・写生派・文人画など多様な画風を示す作品を多く遺している。こうした諸派兼学の傾向は、種々の論考で指摘されている通り、大田南畝や酒井抱一など江戸後期の文化人に見られる特徴の一つであると言えよう。しかしながら、沖一峨が藩の御用絵師であったということを鑑み、他の狩野派を中心とする御用絵師の活動と比較した時、この多様性は一際異彩を放っている。この画風の多様性という一峨の特質は、一体何に起因するのであろうか。

本発表では、こうした画風の多様性が生まれた要因の一つに、一峨の人的交流(公私の両面における人々との交流や、交流を示唆する活動)が深く関与していることを示したい。

そこでまず、一峨の公務における人的交流の様子を、鳥取藩政資料『江戸御用部屋日記』などから、また、そこには記されない交流の様子を、書画会の引札や俳諧摺物などから考察する。これらの資料により、一峨が発会の開催や書画会への参加等に積極的に関わり、谷文晁や喜多武清等同時代の文人たちと交わっていることが判明する。また、藩の記録には登場しない、佐竹永湖や松本楓湖を始めとする多数の門弟を育成していることも明らかとなり、一峨が御用絵師としての公務の域を超えて、江戸の一画家として多彩に活動していることがわかる。さらに、曲亭馬琴や渡辺華山、椿椿山などとの合作作品は、彼らとの交流を示す具体的な資料ともなるだろう。これらの公務以外の活動は、従来さほど注目されておらず、今後さらに解明されるであろう御抱え絵師の実態でもある。

このようにして明らかとなった幅広い交流の具体的な様相は、御抱え絵師という立場においては、非常に際立った特徴を示しており、こうした特異な人的交流が、一峨の多様な画風展開の上に影響を及ぼしたことが推測される。そこで次に、実作の上に、この多彩な交流がどのような影響を与えるかを考察し、一峨の画風の多様性と人的交流との関連性を検証することとしたい。

たとえば、沖一峨筆「駅舎図」(1846年、個人蔵)は、その山肌や木の表現に、一峨の他の作品に見られる落ち着いた筆致とは異なる、激しい勢いのある剛筆で描かれており、一峨の作域の広さを感じさせる一例となっている。しかしこの作品は、渡辺華山の絶筆とされる「黄梁一炊図」(1841年、個人蔵)と構図・筆法等が類似しており、一峨の周辺にいた華山が、作風の上で一峨に影響を与えていることを示す一例となるだろう。また、江戸琳派の影響が強く見られる一峨の花鳥画においては、酒井抱一よりもむしろ、一峨と同世代である鈴木其一や酒井鶯蒲に見られるような機知に富んだ作品が多く、このことは、一峨が人的交流の中でその影響を受けている例と考えられる。

以上、御抱え絵師の公務以外の活動を紹介するとともに、具体的な作品の上に、交流のあった画家の影響が強く看取されることを示し、一峨の多様な画風が、幅広い人的交流と深く関与していることを呈示することとしたい。